

東京荒野 2 風俗客にいそうな格好

湯原昌泰

(前回までのあらすじ)

音楽活動をしていたにも関わらず CD も作らず、自作の文章をコピー用紙に印刷して一つ 100 円で売っていた日々。朝日を浴びて輝くビルを見て泣いたのは、それがあまりに立派だったからであり、折れそうもなかったからだった。この世に物体を作り出したい。そう思い、季刊誌東京荒野を作りはじめる。

雑誌を作ろうと思い立ったのはいいが、それまでに本を作った経験などなかったので、右も左もわからない、文字通り一からのスタートだった。ではなぜ自分一人の本ではなく雑誌だったのかと考えると、ブッキングライブばかりに出ていてワンマンライブをしていなかった、ということがあったように思う。ごく自然と、作るなら雑誌、と思っていた。以後テーマを設げず発行しているのも、ライブに近い感覚で本を作っているからかもしれない。

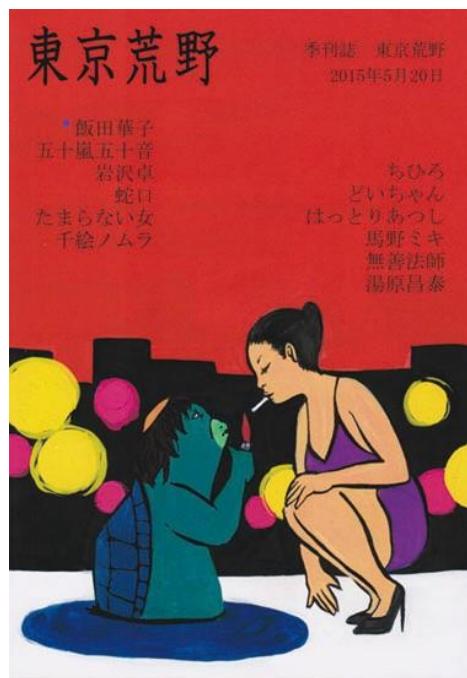
さて、雑誌を作るならまず掲載者を探さなければならない。そう思い、最初に向かったのは飯田華子さんのお宅だった。飯田さんと僕は同じ年で、初めてお会いしたのは下北沢の Laguna というライブハウス。店のブッキングでの共演だった。対バンをして、この人には勝てない。あるいは、この人はやべえと思った人というのは数人いるが、その中でも飯田さんの作る紙芝居は圧倒的だった。話したいことがあると連絡して飯田さんのお宅にうかがい、しばらく取りとめもない話をした後、意を決して、「こんど雑誌を作ろうと思うのよかつたら原稿書いてください」と依頼した。それに飯田さんは「おー、面白そう」とってくれたかどうか。とにかく二つ返事で了承してくれ、第一号ではカバーイラストと本文作品の二つを受け持っていた。その帰り際、「今日は勝負だと思ったんで、持ってる中で一番いい服できたんですよ」と笑いながらいうと、「なんか、風俗客にいそうな格好だなあって思ってました」といわれ、あははははと笑いあつたのを覚えている。

第一号では飯田さんの他に、はつりあつしさん、ちひろさん、千絵ノムラさん、五十嵐五十音さん、馬野ミキさん、蛇口さん、岩沢卓さん、どいちやん、たまらない女、そして無善菩薩に原稿を依頼したが、ありがたいことに皆さん二つ返事で引き受けてくださった。集まった原稿を入稿する際にはそれぞれの作品を PDF 化し、編集不可の状態にして印刷所に渡すが、その作業中、編集できなくなるということはその作品を殺すこと。つまり、俺は今一つ一つの作品の息の根をとめているんだと感じ、ありがとうございます、ありがとうございますと手を合わせながら作業したことを

覚えている。

最後に、第一号に掲載いただいた皆さんほぼ全員、飯田さんが以前にやっていた企画、“l'proud 祭”、“kawaii 祭”、それから馬野ミキさんとの共同企画、“ボーカロイドガール～地球って出会い系やねんで～”で共演した方たちだった。このうちの l'Proud 祭と kawaii 祭は OM CHAN TORN という人形町の店で行われたが、その第一回、僕はふと、マイクってつまり可能性だな。つてことはマイクって超、危険だな。と感じ、初めてお会いした店長のどいさんに、「マイクにコンドームつけてもいいですか？ マイク、危ないんで」といった。今にして思えば僕が店長なら絶対に嫌だけれど、「ちゃんと洗ってつけますから」という血迷ったお願ひに、どいさんは「なるほど～」と理解を示してくれ、本番では華原朋美の歌う l'Proud をバックにマイクにコンドームをつけ、「あぶない、あぶない」とやりながらそれにオナホにぶっさすという持ち時間をやった。そのことを思い出す度に、僕もどいさんを見習い、していただいて嬉しかったことは誰かに返さなければと思っている。

こうして皆さんのお力を借りて、東京荒野は 2015 年 5 月に第一号を発行することになる。



湯原昌泰…1984 年生まれ。茨城県出身、東京都在住。自分の作品を発表する場がなかったことから 2015 年、季刊誌東京荒野を発行。抒情詩の惑星管理人。

東京荒野 <https://www.tokyokouya.com/>

抒情詩の惑星 <https://poetry2021.webnode.jp/>